

# GPT-5.4（2026年3月5日リリース）が日本の知財業務における生成AI活用推進へ与える影響

## Executive Summary

OpenAI <sup>1</sup> が2026年3月5日に発表したGPT-5.4は、長い文脈を保ったままの多段推論とツール利用（検索・業務システム操作）を重視した“本番運用向け”の主力モデルとして位置づけられている。知財（IP）業務にとって重要な「証拠に基づく要約・比較・検証」「多言語・多資料の統合」「監査・統制」という要求に対し、技術面と運用面の両方で導入障壁を下げる要素が揃った。 <sup>2</sup>

特に、①高難度・長時間タスクの完遂性（複数ラウンド検索、資料統合、ワークフロー継続） <sup>3</sup>、②長文コンテキスト（最大約105万トークン）と出力上限拡大（最大約12.8万トークン） <sup>4</sup>、③マルチモーダル入力（画像+テキスト）と高精細画像処理（“original”詳細で最大6000px相当・パッチ上限増） <sup>5</sup>、④ツールカタログの拡大を前提にしたTool searchによるトークン効率化（MCP Atlasでトークン47%減等） <sup>6</sup>、⑤誤り（誤主張・誤回答）確率の低下を掲げた信頼性改善 <sup>7</sup>、⑥監査ログ・権限管理・データレジデンシー等の企業統制機能が、知財部門の“安全に使う”を現実的にする。 <sup>8</sup>

一方で、知財業務は「法的責任」「秘密情報」「生成物の権利帰属」「品質保証」が絡むため、モデルの性能向上＝そのまま自動化ではない。実装の要点は、(a)RAG/検索で根拠を固定し、(b)チェック工程を制度化し、(c)ログ・権限・データ取り扱いをガバナンスに落とす、の三点である。 <sup>9</sup>

## GPT-5.4の主要技術的進化点

以下は、知財業務に直結する観点（性能、理解力、推論、長文、マルチモーダル、セキュリティ・説明可能性、カスタマイズ性、API/運用）で整理した。

### 技術仕様と性能（知財業務に効く“差分”）

GPT-5.4はAPI上のモデル名として `gpt-5.4`、最難度タスク向けに `gpt-5.4-pro` が提供され、ChatGPT側では“Thinking”がGPT-5.2 Thinkingを置き換える形で展開された。 <sup>10</sup>

長文コンテキストは最大約105万トークンで、出力は最大約12.8万トークン。長い特許明細書、ファミリー横断の先行技術集合、出願経過（OA・意見書・補正書等）を“1つのタスク”として扱える余地が広がる。 <sup>4</sup> ただし、標準の272Kを超える扱いはコスト/制限が変わる（長文の常用は要設計）。例えば、公開情報として「272K超のリクエストは使用制限カウントが2倍」という運用上の注意が明示されている。 <sup>10</sup>

ベンチマーク上の伸びは、知財部門が重視する「探索・検索」「複数ツール併用」「視覚文書」寄りに表れている。例えば、コンピュータ操作系OSWorld-VerifiedでGPT-5.2（47.3%）→GPT-5.4（75.0%）、Web探索BrowseCompでGPT-5.2（65.8%）→GPT-5.4（82.7%）等が公表されている。 <sup>11</sup>

```
xychart-beta
title "GPT-5.4の“探索・操作”性能（OpenAI公表ベンチマーク）"
x-axis ["GDPval", "OSWorld-Verified", "ToolathLon", "BrowseComp"]
```

```
y-axis "score (%)" 0 --> 100
bar "GPT-5.4" [83.0, 75.0, 54.6, 82.7]
bar "GPT-5.2" [70.9, 47.3, 45.7, 65.8]
```

11

## 推論・理解力（「分解→検証→統合」を標準動作に寄せる）

GPT-5.4は、長時間・多段のワークフローを「途中で投げずに完了する」方向で設計され、プロンプトで出力契約（output contract）・根拠化（grounding）・引用規則・完了条件を明示すると安定する、と開発者向けガイドが推奨している。知財業務では、請求項サポート、先行技術対比、契約条項の要件抽出など“途中で条件を落とす”事故が致命的になりやすく、この「契約で縛る」設計が導入推進の鍵になる。<sup>12</sup>

また、実運用で重要な“誤り”について、OpenAIの日本語発表では「個々の主張が誤っている確率がGPT-5.2より33%低い」「回答全体に誤りが含まれる確率が18%低い」という形で、信頼性改善を前面に出している。知財の一次ドラフト用途（要約・比較表・チェックリスト生成）で心理的障壁を下げる材料になる一方、ゼロ誤りを保証するものではないので、後段の検証工程は必須である。<sup>7</sup>

## マルチモーダル（意匠・商標、図面、スキャン資料に効く）

入力は「テキスト+画像」で、出力はテキスト。<sup>4</sup>

画像理解では、処理詳細を detail で制御でき、original は「大きく密で空間的にセンシティブな画像、またはcomputer-use画像」に推奨され、gpt-5.4系で最大6000px相当（または10,000パッチ）まで許容する仕様が示されている。<sup>13</sup>

これにより、(a)出願図面の整合確認、(b)拒絶理由通知のPDF（図表・注記含む）の読み取り、(c)商標ロゴ画像の特徴言語化などの支援がやりやすくなる。

## セキュリティ・説明可能性（“使える統制”へ寄る）

GPT-5.4 Thinkingのシステムカードでは、ジェイルブレイク耐性評価、プロンプトインジェクション評価（コネクタ/関数呼び出し）、コンピュータ操作時の確認ポリシー（高リスク操作の確認を、プラットフォーム方針+開発者方針で制御）など、業務エージェント前提の安全設計が詳述されている。特に、確認ポリシーを開発者メッセージでカスタマイズできる設計は、知財業務における「外部送信」「ファイル削除」「登録・申請」等の誤操作に対して有効なガードレールとなる。<sup>14</sup>

説明可能性については、一般的なXAI（根拠提示の形式化）とは別に、OpenAIはChain-of-Thought（推論トレース）のモニタリング可能性の評価を研究領域として扱っている。一方で、ユーザーに推論トレースを常時開示する運用が標準化された、という記載は公式には未指定である（少なくとも本調査範囲の公式文書では、ユーザー向け“完全可視化”の標準提供は確認できない）。<sup>15</sup>

## カスタマイズ性・API/運用機能（知財“本番”の要件に直結）

推論強度・音量制御：Responses APIで reasoning\_effort (none~xhigh) や verbosity を使い、タスクに応じて“重く考える/軽く回す”を制御できる。知財では、①探索（軽く多数）と②精査（重く少数）を分ける設計がROIに直結する。<sup>16</sup>

ツール利用：公式のモデルガイドでは、Web検索、ファイル検索、コンピュータ操作、MCP、Tool search等を含むツール群が示されている。<sup>17</sup>

特にTool searchは、ツール定義を“全部プロンプトに埋める”のではなく、必要な定義だけを取得して実行する前提を作るもので、ツール数が増えるほど効果が出る。MCP Atlas評価でトークン使用量47%減が示されて

いる点は、知財部門が将来「特許DB」「契約DB」「社内DMS」「管理システム」等を多数接続するときの運用コストを押し下げる。<sup>18</sup>

**運用向け機能**：長時間処理に関して、Responses APIの phase（前置き/作業と最終回答の混同を避ける）、長期セッションの compaction（暗号化状態を持ち回る）などがガイドされている。知財の“案件単位で継続する調査”に向く。<sup>12</sup>

**価格・コスト最適化**：OpenAI公表のAPI価格は、gpt-5.4が入力\$2.50/M tok、キャッシュ入力\$0.25/M tok、出力\$15/M tok。gpt-5.4-proは入力\$30/M tok、出力\$180/M tokで、精査フェーズの使い所を絞る設計が必須になる。Batch/Flexは標準の半額、Priorityは2倍という運用メニューも明記されている。<sup>19</sup>

## 知財業務プロセス別影響

知財部門の主要プロセス（特許調査、明細書作成、意匠・商標、契約、侵害、ライセンス、戦略、教育）を、GPT-5.4の機能差分と結びつけて整理する。

### 影響の全体像：“自動生成”から“業務実行（Agentic）”へ

知財で生成AI導入が伸びにくい理由は、(1)根拠の取り違え、(2)見落とし、(3)秘密漏洩、(4)責任所在、の4点が同時に重なるためである。GPT-5.4は、Web探索やツール併用の性能向上を前面に出し、「調べる→まとめる→次の作業を進める」を1つの連続タスクとして実行しやすくしている。<sup>20</sup>

### プロセス別の実務インパクト（要点比較表）

知財プロセス	GPT-5.4で“効きやすい”タスク	GPT-5.4の技術要因	推奨運用（Human-in-the-loop）
特許調査・先行技術調査	検索式案の多言語展開、分類（IPC/CPC/FI等）仮説、検索結果の要約・重複排除、引用関係の整理	Web探索性能向上・ツール併用、長文統合、誤り確率低下の主張 <sup>21</sup>	①RAGで“検索結果集合”を固定→②要約/マッピング→③人が漏れ確認（リコール評価）
特許明細書作成	発明メモ→構成要件展開、実施形態案、請求項ドラフト、先行技術との差分整理	長文コンテキスト、段階推論、文量制御 <sup>16</sup>	①社内テンプレの“出力契約”化→②クレームサポート表を必須→③弁理士/担当が整合レビュー
意匠・商標調査	図面/ロゴ特徴の言語化、類否判断の観点整理、検索クエリ生成	画像理解（detail制御）、ツール利用 <sup>22</sup>	①画像→特徴タグ化→②専門DBの画像類似検索→③最終判断は人（理由付けも人が確定）
契約書レビュー	NDA/ライセンス/共同研究契約の条項抽出、リスク要約、交渉論点の一覧化	長文統合、構造化出力、エージェント堅牢性 <sup>23</sup>	①条項抽出は構造化（JSON等）→②根拠条文リンク必須→③リーガルが最終確認
侵害分析	請求項要件分解、クレームチャート草案、比較表、争点仮説	長文+多資料統合、推論制御 <sup>16</sup>	①証拠（仕様書/分解写真等）を固定→②“不確実性ラベル”付与→③レビュー会議で確定

知財プロセス	GPT-5.4で“効きやすい”タスク	GPT-5.4の技術要因	推奨運用 (Human-in-the-loop)
ライセンス交渉	交渉シナリオ、譲歩案、条項文案、比較表 (競合契約の差分)	構造化・要約、ツール利用	①秘密区分に応じ入力制限 →②ドラフトは“交渉方針”と分離→③承認フロー必須
知財戦略立案	ポートフォリオ分析の言語化、空白領域探索、M&A/提携仮説の整理	長文・多資料統合、表計算支援	①データ整形 (スプレッドシート) →②ナラティブ生成 →③意思決定は人 (根拠監査可能に)
社内教育	出願プロセス教材、事例ベースQA、レビュー訓練 (誤り検出)	文章生成+検索、対話継続	①“模範解答+根拠”で訓練 →②誤回答例も含める→③学習ログ管理

(注) 表の“技術要因”は、モデル仕様・ガイド・評価の公表に基づく。 <sup>24</sup>

## 日本の制度・実務との接続：公的機関の実証から見える“導入余地”

特許庁 <sup>25</sup> 関連の寄稿では、2017年以降AI活用の実証を行ってきた流れの中で、**2024年度の調査事業で「特許文献の要約」「ドシエ情報 (パテントファミリーの出願経過書類等) の要約」「表の構造化」**を対象に調査し、実務活用が期待される結果が得られた旨が明記されている。ここで対象となっている“要約・整理・構造化”は、まさにGPT-5.4が得意領域として伸ばしているタスクであり、民間知財でも導入しやすい第一歩になり得る。 <sup>26</sup>

また、Anaqua <sup>27</sup> のホワイトペーパーは、IP領域のAI活用が当初「ドラフティング、応答準備、翻訳、分類、先行技術調査」などコンテンツ寄りだった一方で、今後はドケットティングやワークフロー自動化まで含む“運用効率”に拡張しうる、と整理している。GPT-5.4のTool searchやエージェント堅牢性は、この“運用効率へ拡張”を後押しする。 <sup>28</sup>

## 定量化・ROI試算の方法

知財への生成AI導入は「工数削減」だけでなく、「精度 (見落とし/誤り)」「リードタイム」「外部委託費」「訴訟/無効リスクの期待損失」まで含めた総合評価が必要になる。

### 効率化の“期待値”をどう置くか (外部エビデンス)

一般業務の文章生成タスクでは、GPT系支援により**平均作業時間が約40%短縮、品質が約18%向上**した実験結果が報告されている (中程度の職業文章タスク)。知財のドラフティングや要約は文章作業比率が高いため、同種の効率化が起こりうる一方で、専門性・確認義務が強い分、実効削減率は“レビュー工程を含む”形で測る必要がある。 <sup>29</sup>

また、コールセンター実データ研究では、生成AI支援により生産性が平均14% (初心者でより大きい) 向上したという報告がある。知財でも新人教育・標準化 (検索式、要約テンプレ、クレームチャート雛形) に効果が出やすい、という示唆になる。 <sup>30</sup>

### 定量試算の基本式 (未指定パラメータを明示)

導入効果を“業務プロセス別”に分解し、次のように積み上げると説明可能性が高い。

### (1) 工数削減（時間）

削減時間 =  $\Sigma$ （年間案件数 × 1件あたり基準工数 × 削減率）

- 年間案件数：未指定
- 基準工数：未指定（現行のタイムシート/工数実績を推奨）
- 削減率：PoCで実測（後述）

### (2) 精度改善（品質）

品質は“誤り/見落とし”を直接測るのが理想だが、知財では代理指標も使う。

- 先行技術調査：Recall@K、重要文献の捕捉率、レビュー指摘件数、検索ラウンド数
- 明細書：サポート要件の欠落率、拒絶理由の類型別発生率（ただし交絡が大きい）
- 契約：重要条項の抽出漏れ率、赤入れ差分件数

GPT-5.4は「誤主張確率33%減・誤回答確率18%減」という方向性を公表しているが、これは一般的傾向であり、知財タスク固有の品質は自社データで測る必要がある。<sup>31</sup>

### (3) コスト（TCO）

TCO = （モデル利用費＋ツール/検索費＋統合開発費＋運用費＋教育費＋ガバナンス費）

- モデル利用費：トークン単価×使用量。gpt-5.4は入力\$2.50/M、出力\$15/M、キャッシュ入力\$0.25/M。Batch/Flexは半額、Priorityは2倍。<sup>19</sup>
- 統合開発費：未指定（RAG構築、権限/ログ、UI組込み、評価基盤）
- ガバナンス費：未指定（監査ログ、レビュー体制、規程整備）

### PoCで“実測”するための設計（知財向けの最小セット）

GPT-5.4は「明確な出力契約、ツール利用期待、完了条件、根拠・引用ルール」を与えると安定するとされるため、PoCもそれに合わせる。<sup>12</sup>

- **対象業務の切り方：**
  - A：先行技術調査の“要約・スクリーニング”
  - B：拒絶理由通知への“論点整理”
  - C：NDA/ライセンス契約の“条項抽出＋論点表”  
（いずれも成果物が定義しやすく、レビューで正誤が判断できる）
- **評価指標：**
  - 時間：着手～レビュー確定までの総タイム
  - 品質：レビュー指摘数、重要項目の漏れ率（ゴールドセットで測定）
  - リスク：個人情報/秘密情報の混入率（検出ルールで測定）
- **実験デザイン：**
  - A/B（従来手順 vs AI併用）
  - できれば差分の原因分析（検索式生成の品質、要約の正確性、引用整合など）

### 例示：効果の“見える化”グラフ（仮定ベース）

以下は例示（仮定）で、入力値は未指定。実務では自社実績に差し替える。

```
xychart-beta
title "例示：プロセス別の工数削減見込み（仮定）"
x-axis ["先行技術調査", "明細書ドラフト", "契約レビュー", "侵害分析"]
y-axis "削減率(%)" 0 --> 50
bar "想定削減率" [25, 20, 30, 15]
```

## リスク評価とコンプライアンス・ガバナンス要件

知財業務の生成AI活用推進で最も重要なのは、“使う/使わない”ではなく、**どのリスクを、どの統制で、誰が負うか**を明確化することにある。

### 誤情報（ハルシネーション）と法的責任

誤情報リスクは「間違った要約」だけでなく、「存在しない判例・引用」をもっとも危険な形で生む。実際に、生成AIが作った架空引用を裁判書面に含めたことによる制裁金・懲戒などの事例が継続的に報道されている。<sup>32</sup>

知財でも、無効資料・侵害訴訟・鑑定・鑑別（類否）などで同種の事故が起こり得るため、「**引用は必ず一次ソースに当たる**」をプロセスとして固定する必要がある。

GPT-5.4は誤り確率低下を主張するが、規制/紛争領域での“無条件依拠”は危険であり、OpenAIの利用ポリシーも安全な利用の枠組みの一部として位置づけられている。<sup>33</sup>

### バイアス

GPT-5.4 Thinkingのシステムカードでは、第一人称公平性評価などでバイアスを測定し、前世代と同等～やや改善とされる。一方で、評価はベンチマークであり、知財の類否判断・侵害判断の“価値判断”を直接置き換える性質のものではない。したがって、バイアスは「最終判断者は人」「判断理由の監査可能性（根拠文書・比較表）を残す」ことで制御する。<sup>34</sup>

### 機密情報漏洩（入力・出力・ログ）

日本の知財業務では、発明未公開情報・営業秘密・交渉戦略が含まれる。これに対し、OpenAIは企業向けに「業務データはデフォルトで学習に使わない」「保存期間の制御（条件付き）」「暗号化」「データレジデンシー（日本を含む）」等を公表している。<sup>35</sup>

ただし、データレジデンシーには「保存場所（at rest）」と「処理場所（推論）」の違いがあり、推論のin-region提供は対象地域が限定される旨も明記されているため、要件が厳しい場合は契約/構成を詰める必要がある。<sup>36</sup>

日本の個人情報保護委員会<sup>37</sup>は、生成AI利用時の個人情報取り扱いについて注意喚起を出しており、例えば「本人同意なく個人データを入力し、応答出力以外目的で取り扱われる場合は法違反となる可能性があるため、提供事業者が機械学習に利用しないこと等を確認すること」などを整理している。知財でも、共同研究者名、発明者情報、顧客情報が混入しうるため、この整理をそのまま社内ルールに落とせる。<sup>38</sup>

### 生成物の帰属・著作権（契約・法・実務の三層）

OpenAIのサービス契約条項では、適用法の範囲で**入力**は顧客が権利を保持し、**出力**は顧客に帰属（OpenAIが有する限りの権利を譲渡）する旨が明記されている。知財部門が成果物（要約、比較表、ドラフト条項）

を社内成果として扱う上での前提になる。<sup>39</sup>  
ただし、契約上の帰属と、著作権法上の保護（人間の創作的寄与など）は別問題である。日本の文化庁<sup>40</sup>は「AIと著作権に関する考え方」を整理して公開しており、学習段階・利用段階双方の論点を把握した上で利用規程を整備する必要がある。<sup>41</sup>

加えて、学習データ・データベース利用をめぐる訴訟・判例は海外で動きが速い。例えば、法情報データベースの利用を巡って著作権侵害が認定された事例が報じられており、“根拠データのライセンス”を軽視したAI活用がリスク化しうる。知財部門が外部DB・論文・ファイルをRAGで扱う際も、利用許諾の整理が必要になる。<sup>42</sup>

## プロンプトインジェクションとエージェント誤操作（ツール利用時の新リスク）

ツール利用（コネクタ、関数呼び出し、スプレッドシート編集、ブラウザ操作）は、知財の生産性を押し上げる一方で、プロンプトインジェクション（外部文書に埋め込まれた指示でモデルを誤誘導）や誤操作（送信・削除）がリスクになる。GPT-5.4 Thinkingの評価では、コネクタに対するプロンプトインジェクション耐性の改善/一部回帰のように、継続評価が行われている。<sup>43</sup>

したがって、知財でのエージェント化は「(1)読み取り専用ツールから開始」「(2)高リスク操作は確認必須」「(3)監査ログで追跡」の順で段階導入するのが安全である。<sup>44</sup>

## 導入ロードマップと運用ベストプラクティス

GPT-5.4は“できること”が増えているため、知財部門では導入の順序が成果を分ける。ポイントは、**低リスク・高頻度から始め、根拠固定とログを先に作り、最後にエージェント化すること。**

### 推奨ロードマップ（例：6か月、未指定要素は適宜補完）

```
gantt
  title 知財部門向けGPT-5.4導入ロードマップ（例）
  dateFormat YYYY-MM-DD
  section 準備
  ユースケース棚卸し/データ区分: 2026-03-10, 14d
  規程ドラフト/合意（法務・情シス・知財）: 2026-03-24, 14d
  section PoC
  RAG基盤（検索・引用）最小構成: 2026-04-07, 21d
  評価設計（ゴールドセット/指標）: 2026-04-07, 21d
  section パイロット
  先行技術調査・契約レビューのパイロット: 2026-04-28, 35d
  section 本番化
  監査ログ/権限/データ保持設定: 2026-05-26, 21d
  エージェント化（読み取り→限定書込み）: 2026-06-16, 21d
```

この設計の前提として、OpenAIの開発者ガイドは「引用ルール、完了条件、ツール利用の期待」をプロンプトレベルで明確化することを推奨しているため、技術PoCと規程整備を並走させるのが合理的である。<sup>12</sup>

### PoC設計の実務ベスト（知財向け）

#### 評価指標（最低限）

-速度：案件あたり総時間（作業＋レビュー）

- 品質：重要項目の漏れ率（ゴールドセットで測定）、引用の正確性
- 安全：機密/個人情報の混入率（ルール検出）、出力の社外持ち出し率（ログ）

### 運用設計（最低限）

- RAGで“根拠集合”を固定し、出力は必ず根拠リンクを伴う（引用ゲート）。<sup>12</sup>
- 高リスク操作（送信、削除、登録、外部共有）は確認必須（確認ポリシー）。<sup>45</sup>
- 権限・ログ：組織単位の監査ログと、APIキー/プロジェクト管理を導入初期から有効化する。<sup>46</sup>

OpenAIのヘルプ/仕様では、監査ログAPIが「改ざんできない監査可能なイベントログ」として、APIキーライフサイクル等を追跡できる旨が説明されている。知財部門の“誰が何を出したか”の説明責任の土台になる。

<sup>47</sup>

### 社内体制・教育（知財特有の“役割分担”）

- ・知財：ユースケース定義、品質基準（何を“合格”とするか）、レビュー責任
- ・法務：契約・著作権・責任分界（生成物の扱い、クライアント説明）
- ・情シス/セキュリティ：データ区分、認証、ログ、DLP、接続先管理
- ・事業部/R&D：発明開示の入力品質、プロンプト標準化、教育参加

教育は「使い方」より「検証の仕方」が重要である。個人情報保護委員会の注意喚起が示すように、入力情報の性質・規約確認・不正確出力の可能性を前提に判断する文化が必要になる。<sup>48</sup>

### 外部委託（弁理士事務所・調査会社）を含む場合の留意点

- ・秘密保持：委託先の利用環境（個別テナント、ログ、学習利用の有無）を契約と実装で確認。<sup>49</sup>
- ・成果物責任：AI生成物は“下書き”であり、最終成果物は人が保証（裁判例・制裁事例が示すように、未検証提出は重大リスク）。<sup>32</sup>
- ・ライセンス：RAGで投入するデータベース/論文の利用許諾を明確化（外部DB訓練・転用の訴訟が示唆するリスク）。<sup>42</sup>

## ケーススタディ想定と推奨ポリシー・テンプレート

ここでは、業種・規模別に「実装の現実解」と、すぐに使える規程/チェックリスト骨子を示す。

### ケーススタディ想定

#### 中堅企業（知財担当 2~8名、外部弁理士依存度高）

狙いは「外部委託を減らす」より、外部委託の質を上げる入力（発明開示・先行技術整理）を高速化すること。

- 第一段階：先行技術の要約・スクリーニング、発明開示テンプレ生成（RAG+引用）
- 第二段階：拒絶理由通知の論点整理、補正方針案（ただし最終判断は弁理士）
- 統制：入力禁止情報（営業秘密のうち未出願のコアなど）を“赤/黄/緑”で区分（未指定の社内分類に合わせる）

#### 大企業（グローバル出願、データ統制・監査必須）

狙いは「全社横断の知財ナレッジ運用」。

- 第一段階：出願経過一式・ファミリー横断の要約（長文）
- 第二段階：IPポートフォリオ戦略（スプレッドシート+ナラティブ）

- 統制：データレジデンシー（日本含む）、暗号化、監査ログAPI、RBAC/SSO、保持期間制御（要件により未指定）を契約・実装で確定。 50

### 法律事務所（クライアント秘密+職責）

狙いは「準備書面」ではなく、**調査・差分整理・条項抽出**を安全に高速化すること。

- 第一段階：契約レビューの条項抽出（構造化出力）+根拠条文リンク
- 第二段階：侵害分析のクレームチャート草案（証拠固定）
- 統制：AI生成の法的助言化を回避（米国で“無許可法律業務”を争点とする訴訟提起が報道されており、生成AIの使い方が争点化しうる）。 51

### 推奨ポリシー雛形（利用規程：骨子）

以下はテンプレ骨子で、実際の条文化には社内規程体系・委託契約に合わせた調整が必要（未指定）。

#### 1. 目的と適用範囲

- 対象：知財部・法務部・R&D・委託先（必要に応じ）
- 対象業務：先行技術調査支援、要約、条項抽出、教育等

#### 2. 禁止入力（例）

- 未公開の発明コア情報（特許出願前）
- 取引先の秘密情報（契約で制限）
- 個人データ（発明者/顧客等）※入力必要時は同意と目的・提供範囲を確認（個人情報保護委員会の注意喚起を社内基準へ転写） 48

#### 3. 出力の扱い（権利・表示・保管）

- 出力は“下書き”扱い、最終成果物は人が確定
- 根拠リンク必須（引用ゲート）
- 保存：案件ID、入力/出力、根拠リスト、レビュー者、版数を記録（出力帰属はサービス契約で顧客に帰属する整理があるが、著作権上の保護は別問題） 52

#### 4. 検証プロセス（必須チェック）

- 先行技術調査：重要引用の一次確認、検索式の再現性、漏れチェック
- 契約：重要条項の抽出漏れチェック、社内標準条項との差分
- 侵害：証拠の所在確認、要件充足の“不確実性表示”

#### 5. ログ・監査・権限

- 監査ログAPIを有効化（原則）
- プロジェクト単位の権限とキー管理
- 退職/異動時のアクセス剥奪（SCIM等は未指定だが、企業向け制御が示されている） 46

### 推奨チェックリスト（短縮版）

フェーズ	チェック項目
入力前	情報区分（赤/黄/緑）は適切か／個人情報が含まれないか／外部DB投入の許諾はあるか
実行中	RAGで根拠が固定されているか／ツールの書込み操作は確認が入るか
出力後	重要引用は一次ソース確認済みか／誤り・作話の兆候（存在しない条文/判例等）はないか／レビュー者が記録されているか

フェーズ

チェック項目

共有前

クライアント/社外共有の可否（契約・秘密保持）／AI生成物であることの取り扱い（必要なら）

## 主要出典リスト

（ユーザー要望により、主要URLを含めて列挙。リンクはコードブロック内に記載。）

[OpenAI 公式（GPT-5.4・仕様・安全）]

<https://openai.com/index/introducing-gpt-5-4/>  
<https://openai.com/ja-JP/index/introducing-gpt-5-4/>  
<https://deploymentsafety.openai.com/gpt-5-4-thinking>

[OpenAI 企業向けデータ保護・契約]

<https://openai.com/business-data/>  
<https://openai.com/enterprise-privacy/>  
<https://openai.com/policies/services-agreement/>  
<https://openai.com/policies/row-terms-of-use/>  
<https://openai.com/policies/usage-policies/>

[OpenAI 開発者ドキュメント（モデル/プロンプト/画像/監査ログ）]

<https://developers.openai.com/api/docs/guides/latest-model>  
<https://developers.openai.com/api/docs/guides/prompt-guidance/>  
<https://developers.openai.com/api/docs/guides/images-vision>  
[https://developers.openai.com/api/reference/resources/organization/subresources/audit\\_logs/](https://developers.openai.com/api/reference/resources/organization/subresources/audit_logs/)  
<https://help.openai.com/ja-jp/articles/9687866-admin-and-audit-logs-api-for-the-api-platform>

[日本：知財×生成AIの政策・ガイドライン]

[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/chitekizaisan2024/0528\\_ai.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/chitekizaisan2024/0528_ai.pdf)  
[https://www.meti.go.jp/shingikai/mono\\_info\\_service/ai\\_shakai\\_jisso/20240419\\_report.html](https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/20240419_report.html)  
<https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/aiandcopyright.html>  
[https://www8.cao.go.jp/cstp/ai/ai\\_act/ai\\_act.html](https://www8.cao.go.jp/cstp/ai/ai_act/ai_act.html)  
<https://laws.e-gov.go.jp/Law/507AC0000000053>  
[https://www.ppc.go.jp/news/careful\\_information/230602\\_AI\\_utilize\\_alert/](https://www.ppc.go.jp/news/careful_information/230602_AI_utilize_alert/)  
[https://www.ppc.go.jp/files/pdf/230602\\_alert\\_generative\\_AI\\_service.pdf](https://www.ppc.go.jp/files/pdf/230602_alert_generative_AI_service.pdf)

[日本：特許実務での生成AI調査（公表資料）]

<https://jpaa-patent.info/patent/viewPdf/4704>

[学術：生産性・知財タスク関連]

<https://www.science.org/doi/10.1126/science.adh2586>  
[https://economics.mit.edu/sites/default/files/inline-files/Noy\\_Zhang\\_1.pdf](https://economics.mit.edu/sites/default/files/inline-files/Noy_Zhang_1.pdf)  
<https://www.nber.org/papers/w31161>  
<https://arxiv.org/html/2406.19465v3>  
<https://arxiv.org/html/2507.22387v1>

[主要ベンダー例（ホワイトペーパー/業界レポート）]

<https://www.anaqua.com/resource/whitepaper-ai-for-intellectual-property-operations/>

[https://50293825.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/50293825/Migrated%20Files/](https://50293825.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/50293825/Migrated%20Files/Whitepaper_AI_for_Intellectual_Property_Operations_24Jul2025_Anaqua.pdf)

[Whitepaper\\_AI\\_for\\_Intellectual\\_Property\\_Operations\\_24Jul2025\\_Anaqua.pdf](https://50293825.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/50293825/Migrated%20Files/Whitepaper_AI_for_Intellectual_Property_Operations_24Jul2025_Anaqua.pdf)

<https://clarivate.com/intellectual-property/white-papers/>

<https://clarivate.com/intellectual-property/brand-ip-solutions/whats-new-in-brand-ip-2025/>

[https://www.thomsonreuters.com/en-us/posts/wp-content/uploads/sites/20/2025/04/The-AI-driven-future\\_2025.pdf](https://www.thomsonreuters.com/en-us/posts/wp-content/uploads/sites/20/2025/04/The-AI-driven-future_2025.pdf)

<https://www.thomsonreuters.com/en/reports/2025-generative-ai-in-professional-services-report>

（補足）一部資料はフォーム入力等が必要で本文確認が難しい場合があり、その場合は「未指定」として扱った。

1 2 6 10 11 18 19 20 21 25 40 <https://openai.com/index/introducing-gpt-5-4/>

<https://openai.com/index/introducing-gpt-5-4/>

3 9 12 16 17 23 24 27 <https://developers.openai.com/api/docs/guides/prompt-guidance/>

<https://developers.openai.com/api/docs/guides/prompt-guidance/>

4 <https://developers.openai.com/api/docs/guides/latest-model/>

<https://developers.openai.com/api/docs/guides/latest-model/>

5 13 22 <https://developers.openai.com/api/docs/guides/images-vision>

<https://developers.openai.com/api/docs/guides/images-vision>

7 31 33 <https://developers.openai.com/api/docs/models/gpt-5.4>

<https://developers.openai.com/api/docs/models/gpt-5.4>

8 35 36 49 50 <https://openai.com/business-data/>

<https://openai.com/business-data/>

14 15 34 37 43 44 45 <https://deploymentsafety.openai.com/gpt-5-4-thinking>

<https://deploymentsafety.openai.com/gpt-5-4-thinking>

26 <https://jpaa-patent.info/patent/viewPdf/4704>

<https://jpaa-patent.info/patent/viewPdf/4704>

28 [https://50293825.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/50293825/Migrated%20Files/](https://50293825.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/50293825/Migrated%20Files/Whitepaper_AI_for_Intellectual_Property_Operations_24Jul2025_Anaqua.pdf)

[Whitepaper\\_AI\\_for\\_Intellectual\\_Property\\_Operations\\_24Jul2025\\_Anaqua.pdf](https://50293825.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/50293825/Migrated%20Files/Whitepaper_AI_for_Intellectual_Property_Operations_24Jul2025_Anaqua.pdf)

[https://50293825.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/50293825/Migrated%20Files/](https://50293825.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/50293825/Migrated%20Files/Whitepaper_AI_for_Intellectual_Property_Operations_24Jul2025_Anaqua.pdf)

[Whitepaper\\_AI\\_for\\_Intellectual\\_Property\\_Operations\\_24Jul2025\\_Anaqua.pdf](https://50293825.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/50293825/Migrated%20Files/Whitepaper_AI_for_Intellectual_Property_Operations_24Jul2025_Anaqua.pdf)

29 <https://www.science.org/doi/10.1126/science.adh2586>

<https://www.science.org/doi/10.1126/science.adh2586>

30 <https://www.nber.org/papers/w31161>

<https://www.nber.org/papers/w31161>

32 <https://www.reuters.com/legal/litigation/judge-fines-lawyers-12000-over-ai-generated-submissions-patent-case-2026-02-03/>

<https://www.reuters.com/legal/litigation/judge-fines-lawyers-12000-over-ai-generated-submissions-patent-case-2026-02-03/>

38 48 [https://www.ppc.go.jp/files/pdf/230602\\_alert\\_generative\\_AI\\_service.pdf](https://www.ppc.go.jp/files/pdf/230602_alert_generative_AI_service.pdf)

[https://www.ppc.go.jp/files/pdf/230602\\_alert\\_generative\\_AI\\_service.pdf](https://www.ppc.go.jp/files/pdf/230602_alert_generative_AI_service.pdf)

39 52 <https://openai.com/policies/services-agreement/>

<https://openai.com/policies/services-agreement/>

41 <https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/aiandcopyright.html>

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/aiandcopyright.html>

42 <https://www.reuters.com/legal/thomson-reuters-wins-ai-copyright-fair-use-ruling-against-one-time-competitor-2025-02-11/>

<https://www.reuters.com/legal/thomson-reuters-wins-ai-copyright-fair-use-ruling-against-one-time-competitor-2025-02-11/>

46 47 <https://help.openai.com/ja-jp/articles/9687866-admin-and-audit-logs-api-for-the-api-platform>

<https://help.openai.com/ja-jp/articles/9687866-admin-and-audit-logs-api-for-the-api-platform>

51 <https://www.reuters.com/legal/legalindustry/openai-hit-with-lawsuit-claiming-chatgpt-acted-an-unlicensed-lawyer-2026-03-05/>

<https://www.reuters.com/legal/legalindustry/openai-hit-with-lawsuit-claiming-chatgpt-acted-an-unlicensed-lawyer-2026-03-05/>